

はじめに

貧困とは日本の社会にとどまらず、世界にとって深刻な社会問題であると考え。厚生労働省の国民生活基礎調査によると、日本はアメリカ、中国について、世界第三位の経済大国でありながら、現在、日本では7人に1人が貧困に苦しんでいるとされる。日本政府が相対的貧困率を大々的に発表したのは2009年10月である。それまで、日本は貧困というものが存在していながらも問題として提起されていなかった。貧困問題を政府が提起しておらず、国民も日本は格差社会ではないと信じている人が多く存在していたが、2009年になり相対的貧困率が明らかにされてからは日本が格差社会であると認識し始めた。

貧困率は1985年から右肩上がりに上昇し続けており、16%を超えた。厚生労働省の結果の概要〔注1〕では、子どもの定義は18歳未満とされている。結果からもわかるように、国民の貧困率と同じく子どもの貧困率も同時に上昇している。さらに気になったことが子供の貧困率の上昇のペースが社会全体の貧困率の上昇率のペースに比べて早いことである。景気の変動による波はあるものの、単なる景気動向に影響されているものではないことを表している。

本論では、放課後格差の是正について述べていく。放課後格差が生まれる原因として、放課後に習い事をできる家庭とできない家庭が存在するからだ。習い事をするのできる家庭とそうでない家庭とでは、子どもが得るものが全然違う。例えば、友達の幅、努力して結果を出すこと、学校のテストの順位、有能感、コミュニケーション能力などがある。これらは、習い事を通して得ることが多い。しかし、習い事を全員がしているわけではないので、このような経験を積むことができない子供も存在する。習い事をするにはお金がかかり、貧困家庭においては大きな資金になってしまう。子供の成長のためなら親がお金を出すべきだと思ってしまうが、貧困家庭にとっては生活ができなくなる可能性がある。貧困家庭の子どもは、お金がなくて保険を辞めたり、一日二食にするなど削れるところは削って生活している。そんな家庭に習い事をさせるなど無理な話である。

習い事を無料にさせてあげればいいのかと考える方もいるかもしれないが、それでは会社が成り立たなくなる。会社も資金を得て、活動をしている。その資金が無ければ、会社は成り立たなくなり、倒産してしまう。そうなれば、貧困家庭はさらに増えるだろう。

本稿では貧困対策を述べ、その貧困対策を進めるうえでの課題を述べていく。

## 本論 一章 放課後格差の改善

筆者は放課後格差がなくなり、子どもの居場所づくりに力を入れれば子どもの貧困は改善することができるのではないかと考える。現在の日本では、放課後に部活動がある。文科系や体育会系など学校によってさまざまな部活動がある。また、練習するだけでなく、市の大会や県の大会、全国大会にまでつながっているものもある。本稿では放課後格差を是正するために一つ目は部活動を提案する。部活動は小学校、中学校、高校まである。習い事とは違い、月謝などはないことが多く、費用がそこまでかからない。体育会系の部活動では、試合の時に着用するユニフォームなどは学校からの貸し出しで、一人ひとりユニフォームを買うわけではない。また、指導者も学校の先生であることが多く、費用が掛かるわけではな

い。

筆者が放課後格差の是正に部活動を提案したのは、子どもにとって一番身近な居場所になることができると考えているからだ。前述したように、部活動では大会、作品展など目標を目指して真剣に努力し、取り組むことができる。また、仲間と協力して困難なことにも乗り越える経験をすることができ、後の人生に役立ってくる。ここで、筆者の経験を書く。

小さいころからサッカーを始めた筆者のサッカー人生は順調ではなかった。けがの影響で全国大会に出場することができなかった。しかし、その悔しさや自分も全国大会に出たいという思いから日々、努力を続けて

中学生のころにはレギュラーになることができ、全国大会を目指して練習に励んだ。しかし、チームは県大会で負けてしまい、筆者の夢はかなわなかった。しかし、その悔しさがあったから高校でもサッカーを続けて努力した。

筆者はこの経験からさまざま物を得た。まずは、有能感だ。有能感を得ることで、自分に自信を持つことができ、何か困難なことが起こったとしてもそれに立ち向かうことのできる意思がある。有能感が有ると無いでは、なにかにチャレンジするかどうか変わってくる。チャレンジするかどうかでその人の人生の選択も変わってくるし、人としての幅も変わってくる。子どもは有能感を持つべきだ。

次は、努力することで得ることのできる達成感や結果だ。これは何かにチャレンジしないと得ることができない。達成感を得ることで人は喜び、また何かに取り組もうと考えるようになる。努力を続ければ結果を出せるということを実感することができれば、人は努力することを苦にはならないだろう。このような経験とするかしないかでは、人の人生は変わる。何か困難な壁からずっと逃げ続けるか、それに立ち向かうかで人の将来は変わる。しかし、努力し続ければ必ず結果が出るということをここで言いたいのではなく、努力をしなければ自分のやりたいことはできないということを伝えたい。

次は、コミュニケーションだ。部活動に入っていれば先輩や後輩、顧問などに関わる。先輩後輩の関係は学校生活を過ごしているだけではなかなかできず、部活動をしていたからこそつながった仲間だ。この仲間は人生ではとても重要な仲間で、卒業して離れてもつながっていられる。また、苦しい状況を仲間と乗り越えたことは自信にもなる。

部活動は学校に大体あるもので、お金はそこまでかからない。この経験をするかどうかで人生はだいぶ変わる。子どもには是非、部活動に入ってもらって自分の居場所の一つにしてもらいたい。

本稿での次の提案は、子ども食堂だ。子ども食堂は安価の値段で食事が提供され、宿題や遊ぶことができ、人とコミュニケーションをとることができる。また、子ども食堂では日ごろ話すことが少ない目上の年代の人と話す機会があり、ご飯を食べられるだけでなくコミュニケーション能力なども磨ける。

子ども食堂を挙げた理由は三つある。一つ目は、食事を食べられることだ。貧困家庭においては子どもが満足に食事をとることができない。また、食べられたとしてもインスタントなどの栄養バランスの偏った食事になっており、健康に良くない。子ども食堂では、安価な値段で栄養士さんなどが考えたバランスの整った食事が提供される。

二つ目は、孤食を防げるからだ。現代の社会は時間の使い方が複雑化しており、働く時間などが人によって異なっている。子ども食堂では、ご飯を提供してくれる大人や子ども食堂

に来る子供たちと一緒にご飯を食べることができる。机をみんなで囲むことで楽しく食事をとることができる。一人で食べると、誰とも話さずにご飯を食べるので食事もうまくない。また、食事マナーも学ぶことができる。

三つ目は、コミュニケーションが取れるからだ。貧困の子どもにかかわらず現代の子どもはコミュニケーション能力が低い。ここでいうコミュニケーション能力とは対人と話すことを意味する。コミュニケーション能力の低下は SNS の普及やゲーム機の発達、公園の数が減少していることなどが原因と考えられる。公園などに行っても小学生が動いていることを自分たちの頃より少ないと感じる。また、小学生のころからネットゲームや携帯電話を使って動画を見て遊ぶなど体を使うことが少なく、人との関わりも減少している。実際、目上の方と話すときに現代の子どもはコミュニケーション能力がとても低い。また、積極性に欠けるという話を聞く。人の目を見て話すこと、挨拶をしっかりすること、時間をしっかり守ることなど最低限のコミュニケーションすらできない子供が増えてきている。

子ども食堂ではこのようなマナーも学ぶことができ、自分たちより目上の人と話すこともできる。目上の人と話すことは今では珍しくなってしまう、子どもにとってとてもいい機会になる。目上の人と話すことで、人生経験を学ぶこともできるし、進路の相談や悩みの相談もできる。筆者も、子ども食堂でご飯を食べ終わった後に、中学生の子に進路の相談をされた。将来の夢は決まっているが、「高校にはどこに行けばいいか」、「今後どのように勉強すればいいのか」、「どこの塾がいいか」など進路の相談をされた。聞かれたことは答えてあげ、役に立ちそうなことは先輩として話してあげた。このように、子ども食堂では質問や相談などもすることができ、悩みを打ち明けることができる。その他に子ども食堂は子どもの居場所にもなるし、孤食や家で一人いることを防ぐことができる。

## 本論 二章 放課後格差の課題

一章では、放課後格差の是正のための提案をしてきたが、二章では放課後格差をなくしていくうえでの課題を考えていく。まずは、部活動の無償化だ。その前に先日政府が決定した、幼児・高等教育の無償化の方針が決定されたことについて話す。決定された背景として、消費税増税が関係している。10%に引き上げ、低所得者世帯を対象に授業料や入学金を免除し、給付型奨学金を支給することが決まった。{注2}。低所得者にとっては、進学への道が開けた方針が立った。しかし、部活動までの保証はされていない。部活動の無償化は無理なのだろうか。部活動で主にかかるお金としては、用具や移動費、登録費などだ。習い事とは違って、指導者にお金を払うことはない。部活動の効果はとて多くあり、部活動が子どもにとっての楽しみであり、居場所である。それを子どもに平等に与えられないのだろうか。

部活を無償化するうえでの課題は何だろうか。それは、資金だ。日本は借金大国だ。子どもの未来はとても重要であり、国にとってもいい人材がそろえば社会に良い影響を及ぼすことが予想される。しかし、国が借金で追い込まれてしまえば、貧困家庭は増加し負の連鎖だ。国の借金が減り、オリンピック効果などで国の資金が潤えばいずれはできる可能性があるかもしれないが、このような問題が今あるので現実的には無理だろう。

次は、子ども食堂だ。子ども食堂は決して営利目的で行っているわけではない。まずは、それを一般の人に知ってもらわなければいけない。子ども食堂をしていて思ったことは、一般の人の子ども食堂に対する偏見だ。子ども食堂は貧困の子どもが行くというイメージが

とても根強く残っていて、筆者の行っている地域ではビラ配りもさせてもらえない。また、学校側から宣伝も拒否されており、地域に密着しておらず子どもの数もそこまで伸びていない。まずは、子ども食堂のイメージの返還が課題だ。子ども食堂は食事の提供もされるが、勉強を教えてもらえたり、遊ぶこともできたりなど子どもが公園でしていることと大差ない。子ども食堂に来ている人が貧困家庭の子どもばかりというわけでもない。お金に悩んでいるから子ども食堂でご飯を食べているのではなく子ども食堂にみんなで遊びに来ている子どももいる。このようなことを SNS やメディアで拡散し、さまざまな親に知ってもらう必要がある。子ども食堂は貧困の家庭の子どももが行く場所だから行かせない親がいる、私の家は貧困家庭ではないから行かなくていいなどのようなことを耳にすることがあるが、子ども食堂は決して貧困のためだけの場所ではない。親の余計なプライドなどは捨てて、子どものために考えてほしい。子ども食堂に来ることは恥ずかしいことでもなく、人との交流の場だ。このような機会があるのに参加しないのはとても損をしている。

また、筆者が行っているある子ども食堂は転勤が多い世帯がいるということで、子ども食堂が地域になじんでいないことも問題だ。転勤が多いことで、地域に何があるかなどの情報を知らないまま他の地域に行ってしまう家庭があるなどがあるそうだ。

ここで本稿の提案は、学校に協力してもらい子ども食堂を宣伝してもらうことだ。まずは、学校に子ども食堂とはどういうものなのか認識してもらう必要がある。そして、保護者の方にも子ども食堂を認識してもらう。子どもは学校に毎日通うので、学校で宣伝することが一番効果あることだと考える。そして、もう一つは子ども食堂をニュース特集などで取り上げることだ。テレビで発信することで社会に浸透させることができる。子ども食堂の存在意義などをテレビで取り上げることで、子ども食堂というものを理解し、子どもを行かせてみようという気持ちになる可能性がある。現代では、SNS やメディアが情報ツールになっているので時代の流れに沿って宣伝することで拡散させることができる。子ども食堂のイメージを根本から変えることができれば、子ども食堂に子どもを行かせてみよう、子ども食堂は遊びの場所にしてみようなどプラスの考え方になるかもしれない。

次の問題は子ども食堂の費用だ。子ども食堂推進事業助成では開設につき一か所につき 5 万円を上限に助成されている。また、運営助成金は月 2 回以上を条件に月 2,000 円、月 4 回 4,000 円支給される。{注 3} このような援助を実施しているが、実際は全部の子ども食堂が加入しているかどうかはわからない。子ども食堂は公民館やマンションの共同部屋、図書館の空き部屋などを借りて行うことが多い。借りるときにお金が発生しているかどうかは場所によって異なるが、筆者の行っているところでは費用はかかっている。また、子ども食堂での食材費用もかかる。食材は近くのスーパーや地元の人から寄付してもらうか、低価格で譲ってもらうこともあるそうだ。しかし、このような状態も続くことは難しい。子ども食堂はボランティアで、ボランティアの人が毎回、自分のお金から出していたらいつかは存続が難しくなって子ども食堂をやめないといけなくなってしまふ。子ども食堂がなくなってしまえば子どもの居場所が一つ減ってしまう。子ども食堂を存続させるためには、他からの援助が必要だ。愛知県では現在 46 個{注 4}、名古屋市では 32 個ある {注 5}。この数字は正式に認められている数であり、もっと数はあるかもしれない。しかし、このマップに載らなければ、認知してもらうことが限りなく低くなってしまふ。正式な子ども食堂は子ども食堂マップに載り、そのマップを見れば地域にどこがあるかが一目でわかるようになっている。

このマップに載るか載らないかだけでも人が来るかどうか変わってくるだろう。また、子ども食堂を探している人にとってもマップに載っているほうが安心でき、信頼して子ども食堂を訪れるだろう。子ども食堂を開催しているところがマップにどんどん増えていけば、子ども食堂がもっと人が来るようになり、また、社会から認知されるだろう。

## まとめ

本稿では前提としてあることを言いたい。それは、計画性を持った子育て、家庭を持つことの責任を持つことだ。計画性のない出産はその後生活が貧しくなり、離婚または児童虐待につながる。離婚してしまえば一番被害を受けるのは子どもだ。子どもの未来を大人の身勝手な行動により潰していいわけがなく、また、子どもは生まれてくる家を選択することができない。どんなにいい政策や対策があっても計画性のない身勝手な行動を助けてあげられるほどの余裕は誰しもないだろう。安易な気持ちで家庭や子どもを持ってはいけない。しっかりとした責任感がある人間にだけが持つことが許されるべきものだと思う。もちろん、これは不可能に近いことは分かっている。しかし、生ぬるい安易な考えが日本社会までも破滅へと追いやってしまうかもしれない。責任感を持った行動をとるだけで貧困は防げる可能性があるかと筆者は考える。

本稿では放課後格差の是正について述べたが身近で一番大切なのは親の存在だ。子どもにとって親は一生の見本であり続けなければいけない。親の存在はそれだけ子どもにとってキーパーソンである。前述したとおり、親の学力などはほとんど遺伝しないし、関わり次第で貧困からも脱出できる。自分の過去は変えられなくても子どもの現在、将来は十分に変えられる。現代の社会は時間などがとても複雑になっており、また、職業も多数存在し日本人はよく働いているが、子どもとの時間がとても少なくなっている。もちろん、稼ぎがないと家族を養っていけないが、子どもとの時間こそが何より大事だと思う。現代の親を見ているととても責任感がないなと思ってしまう。20歳の自分でも、あの大人だらしのない、責任感がなく身勝手だな、子どもには視線を向けず公園で携帯ばかり触っていて育児はそれでいいのかと思うときがある。子どもの親としての自覚を親たちにはしっかりと教えなければいけないし、責任感ある行動をとってもらいたい。

しかし、これは女性に限った話ではない。男性の育児参加も急務だ。男性の育児参加が加われば女性のストレスや身体的・精神的疲労も軽減することができる。現代の社会がワークライフバランスをもっと考えなければいけない。そして、育児休業を取得しやすい社会にしなければいけない。日本人は性格的に誰かに同調する傾向があり、周りからの視線を気にしており、とても敏感に反応する。これを応用すれば、会社内の数人が育児休業をするようになればそれに同調してどんどん取得率が増加していくことも可能性として考えられる。誰かが先頭に立ってというのは難しいかもしれないから政府が後方支援する必要がある。

日本の未来は子どもたちにかかっている。少子化が進む中、子どもたちの質を上げていかないと日本の未来は明るくないだろう。子どもにかかる費用は未来への投資であり、必要不可欠なものだ。貧困経路はさまざまあるが、政府の支援がないとできないこともあり、政府は予算の使い方を変更することも必要になるだろう。あとは、一人一人の責任感、考え方で貧困は減らせると私は考える。

引用元

{注1} 厚生労働省 「国民生活基礎調査 結果の概要」

<https://news.yahoo.co.jp/byline/ohnishiren/20170627-00072619/>

{注2} 日本教育新聞 政府が幼児・高等教育の無償化についての方針を決定

<https://www.kyouiku-press.com/post-197227/>

{注3} 子ども食堂設備助成金のお知らせ

[www.showaku-shakyo.jp/pdf/kodomoshokudo1710.pdf](http://www.showaku-shakyo.jp/pdf/kodomoshokudo1710.pdf)


{注4} 愛知県ホームページ 子ども食堂マップ(愛知県)

[https://www.pref.aichi.jp/uploaded/life/223146\\_666173\\_misc.pdf](https://www.pref.aichi.jp/uploaded/life/223146_666173_misc.pdf)

{注5} 愛知県ホームページ 子ども食堂マップ (名古屋市)

[https://www.pref.aichi.jp/uploaded/life/223146\\_666178\\_misc.pdf](https://www.pref.aichi.jp/uploaded/life/223146_666178_misc.pdf)

## 12月8日藤が丘子ども食堂


<p>1、子ども食堂紹介</p> <p>開催場所：名古屋市名東区藤が丘177 市営藤が丘荘4F集会室</p> <p>代表：木村さん</p> <p>実施日：毎月第2土曜日(10.00～13.00)</p> <p>参加費：子供無料、大人300円</p> <p>参加人数：21人</p> <p>献立：麻婆豆腐、サラダ、玄米、餃子、青菜炒め、お味噌汁、ケーキ、たません</p>	
<p>2、当日の流れ</p>	
<p>10.00～ 集合、雑談、ご飯の作り方の確認、準備</p> <p>10.40～ ご飯を一緒に作る</p> <p>11.30～ ご飯完成、ボランティアも参加者も一緒に机で食べる</p> <p>12.40～ 片付け</p> <p>13.30～ 解散</p>	
<p>3、食材、献立</p>	
<p>食材：近くのマックスバリューで買ってくる、寄付もある。</p> <p>献立：管理栄養士の福岡さんがバランス良い食事を考える、事前に何を作るか決めておくので当日はスムーズに作れる。当日にメニューを変えることもある。</p>	
<p>4、感想</p>	
<p>夏以来、2回目の訪問で前回は参加者が少なかったが、今回は21人もいて驚いた。特に、子供が10人も来てくれた。12月ということでクリスマス風の室内に装飾し、ケーキを用意してもらった。とても賑やかな雰囲気、高齢者と子どもが話す機会もあり良い空間だった。</p> <p>しかし、未だに問題点は解決されていないと実感した。木村さんの話を聞くと、まだ子ども食堂というものを地域に受け入れてもらえておらず、お知らせしても断られることが多いことがわかった。子ども食堂=貧乏な人が行くというイメージが拭いきれておらず、足を運ぶ人が少ない。今回来てくれた人も地域の人ではなく、少し離れた梅森の方だった。</p>	

11月17日かみやしろ ふれあい食堂


<p>1、子ども食堂紹介</p> <p>開催場所：名古屋市名東区コープ愛知 上社店二階組合員集合室</p> <p>代表：春日井さん</p> <p>実施日：毎月第3土曜日(12.00～14.00)</p> <p>参加費：子供100円、高校生以上300円</p> <p>参加人数：ボランティア10人、35人</p> <p>献立：カレーライス、サラダ、フルーツ、柿</p>	
<p>2、当日の流れ</p> <p>10.00～ 集合、ご飯の作り開始、席の準備</p> <p>11.30～ ご飯完成、準備終わり</p> <p>12.00～ お客さん来る</p> <p>13.00～ 食事終了、ハーモニカ演奏開始</p> <p>14.00 イベント終わり</p> <p>14.00～ 片付け開始</p> <p>15.00～ 反省会、次回の準備の話</p> <p>15.30 解散</p>	
<p>3、食材、献立</p> <p>食材：いつもおじさんから寄付してもらっている</p> <p>献立：事前に何をやるか話して作れるものは作って、作ることが難しそうならメニューを変える。みんなで話し合っ決めて、調理もみんなです。</p>	
<p>4、感想</p> <p>藤が丘でイベントがあり、上社ではウォーキングのイベントがあったため、いつもより人数が少なく、常連の人も来なかった。</p> <p>ボランティアの人は女性のみで60歳以上の人が多かった。そのため、高いものを取るのが困難で、力仕事は大変だとおっしゃっていた。ボランティアの人たちは気さくな方が多く、参加者ともコミュニケーションを取っていた。参加者も高齢な方が大半だった。</p> <p>食後のハーモニカ演奏のイベントや、参加者とボランティアでの全員合唱は一体感を感じとてもいいイベントだったと感じた。しかし、ネタ切れだということも言われアイデアが浮かばずイベントが詰まり気味だと聞いた。子ども向けのイベントを行うことで集客を上げることがいいと提案させていただいた。</p>	



7月14日 藤が丘子ども食堂

<p>1、子ども食堂紹介</p> <p>開催場所：名古屋市名東区藤が丘177 市営藤が丘荘4F集会室</p> <p>代表：木村さん</p> <p>実施日：毎月第2土曜日(10.00～13.00)</p> <p>参加費：子供無料、大人300円</p> <p>参加人数：ボランティア6人、1家族</p> <p>献立：豆腐ハンバーグ、サラダ、コーン入り炊き込みご飯、お味噌汁、フルーツ</p>	
<p>2、当日の流れ</p> <p>10.00～ 集合、雑談、ご飯の作り方の確認、準備</p> <p>10.40～ 子供2人くる、ご飯を一緒に作る</p> <p>11.30～ ご飯完成、ボランティアも参加者も一緒に机で食べる</p> <p>12.40～ 片付け</p> <p>13.15～ 解散</p>	
<p>3、食材、献立</p> <p>食材：近くのマックスバリューで買ってくる</p> <p>献立：管理栄養士の福岡さんがバランス良い食事を考える、事前に何を作るか決めておくので当日はスムーズに作れる</p>	
<p>4、感想</p> <p>三連休ということもあり、ほとんど来なかった。また、宣伝が全く行き渡っていないので、この地域では知らない人が多数いるのではないかと感じた。ボランティアの人たちは管理栄養士の人や、トワイライトスクールで働いている人などがおり、子供のことが大好きなのがとても伝わってきた。</p> <p>管理栄養士の方が献立などを決めていることもあり、美味しく、バランスが取れた食事を提供している。しかし、マックスバリューで毎回買っているので参加者が多いと資金が足りなくなると思う。</p> <p>ここの課題は、地域が子ども食堂は貧困の人が行くという固定概念があるためにその考えを変えないと人が集まらないと思う。また、名東区は比較的裕福な人が多いので変なプライドを持って子ども食堂に来ない。これからの改善点は地域に理解してもらうのと宣伝をすることだと思った。</p>	

## 7月15日 おかえり食堂

<p>1、子ども食堂紹介</p> <p>開催場所：豊田市梅坪町 1-5 梅坪台交流館</p> <p>代表：とのもさん</p> <p>実施日：毎月第3日曜日(17:00～19:00)</p> <p>参加費：子供300円、大人500円</p> <p>参加人数：15人程度</p> <p>献立：冷うどん、いなり寿司、おにぎり、肉巻き、フルーツ</p>	
<p>2、当日の流れ</p> <p>15:00～ ボランティア集合、準備開始</p> <p>17:00～ 受付開始</p> <p>18:15～ 片付け開始</p> <p>19:00～ 終了、解散</p>	
<p>3、食材、献立</p> <p>食材：スーパーからの提供、残りは買いに行く、農家さんからもらう</p> <p>献立：以前は管理栄養士が考えていた。今は、担当者が一人で考え、欲しい材料は提供してもらうか、買いに行く。</p>	
<p>4、感想</p> <p>三連休で日曜日だったので来る子供は少なく、ボランティアをしている子供が来ていた。比較的元気な子供が多く、女の子が多かった。バランスのとれた食事でも量も満腹になるくらい多く、満足できた。</p> <p>代表者の方は、多世代の方、地域の方とのつながりをしてもらいたいと思ったのが始めたきっかけだと言っていた。しかし、孤食で悩んでいる子供は平日の方が多と思うから、できることなら平日にやりたいとも言っていた。</p> <p>ここでの課題は子ども食堂を地域の人に認めてもらうことだと考える。なぜなら、交流館を借りるにしても子ども食堂をやるというと貸してもらえないからだ。世間一般的に子ども食堂=貧困というイメージが定着していて、周りからの目線を気にしたり、プライドが邪魔して来る人が少ない。</p> <p>恵まれている点は、地域のスーパーが欲しい食材を提供してくれるから作りたいものは大抵作れるし、経費も抑えられることだ。</p>	